



Kashima Arts

An Exhibition of
Japanese Paintings and
Works of Art

2020 SPRING

BISAI SEN 撰

○
三



若き應挙、
氣迫に満ちた
傑作

明和2年頃、應挙30代前半の作。落款にある「儀嶺」は「應挙」を名乗る直前に用いた号である。鋭い鉤爪を振りかざしながら、黒々とした雲を齧ぎ払い、顔を覗かせる龍の姿は迫力に満ちており、観る者に恐怖の念すら抱かせる。架空の存在をこれほどの実在感で描き出すことが出来たのは、写生派の祖たる應挙ならでは。構図等は狩野派の典型表現に倣つたものだが、力強く氣迫に溢れた筆遣いで雄渾な龍の姿を描き出し、若いながらもすでに優れた画力を備えていたことが本作からは窺える。



013

円山 應挙 雲龍図

あいざん ようきょく
くもりゆうず

紙本 淡彩
130×50 cm / 224×65 cm

Mariyama Ōkyo (1733-1795)
Dragon in Clouds

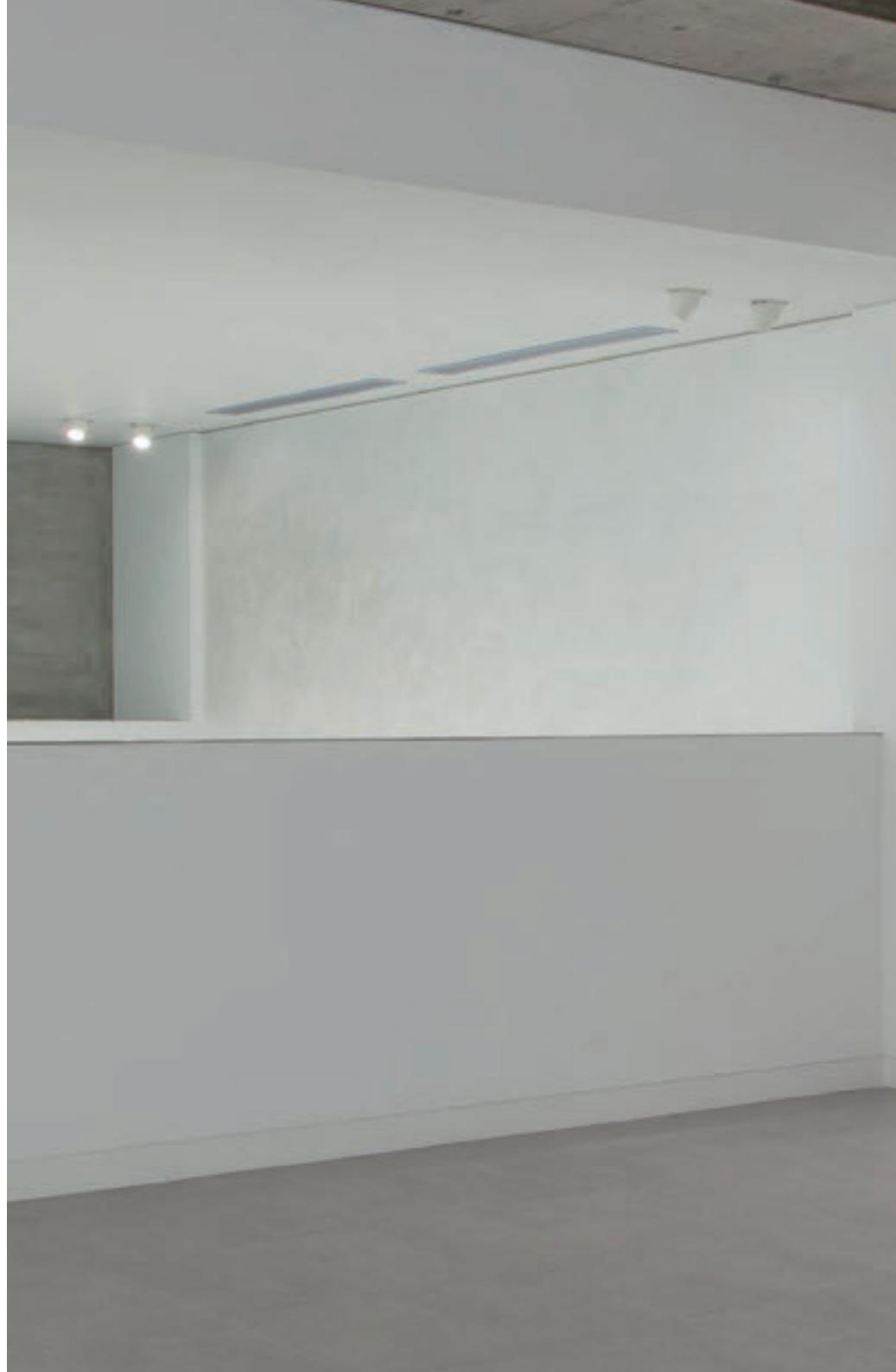
Slight color on Paper

¥8,000,000



孫少川





101





059

石川 九楊
鳥 I

紙本 水墨 共シール
石川九楊真蹟之證
登録番號第0559號
額装
22×16cm / 35×28cm

Ishikawa Kyoyo (1945-)

Bird I

Ink on paper.

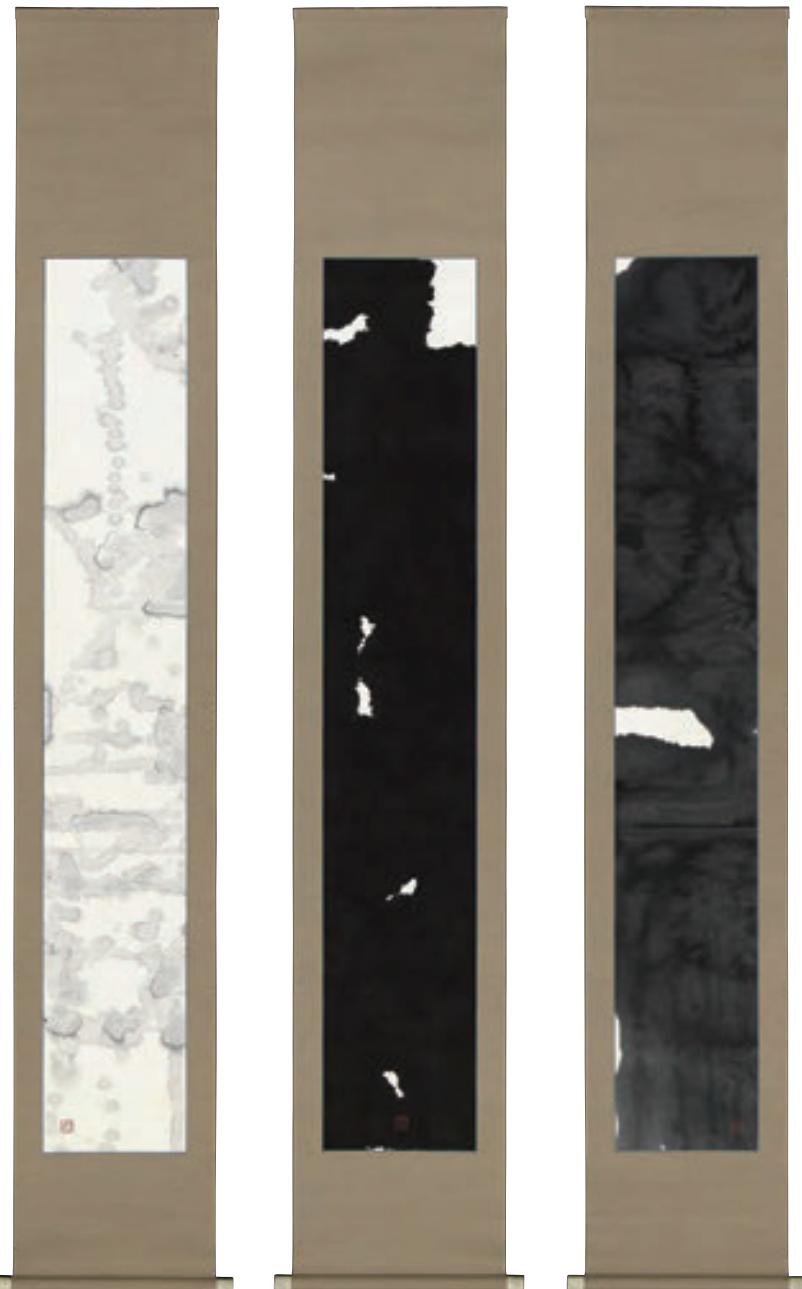
with a label signed and sealed by the artist,
framed, with a certificate of authenticity
(by Ishikawa Kyoyo Shinseki no Sho
(Registration no. 0559))

¥800,000

言葉を書く
芸術

前衛書が産声を上げた昭和20（1945）年に寄しくもこの世に生を受けた九楊。書は「言葉を書く」藝術とし、起筆・送筆・終筆のそれぞれの段階で筆と紙の間に生じる接触・摩擦・離脱の感触と痕跡である「筆蝕」を本質に据え、前衛書の新たな理論と実験を自身の書業に重ねながら書そのものの本質に迫った。
△群衆立棺文明△は詩人・田村隆一の「立棺」に着想を得た作品で、文字としての安易な読解こそ許さないものの、精神と身体のせめぎ合いが筆と紙の接触面にありありと刻まれている。それは筆蝕という命のあり様の、他の何ものにも還元しえない姿といえよう。

△鳥△では筆先と表面の接触から生じる身体と言葉の対峙において、一点一画に潜む力の流れを拾い上げる九楊の筆が、「鳥」という記号に自由に空を舞う生命としての血肉を与えていた。言葉を「書く」ことは己の存在を刻むことであり、そこでは単なる文字や造形としての線や墨象を超えて「搔く」「描く」「画く」「欠く」という出来事が重なり合っている。



058

石川 九楊 いしかわ きゅうよう
群衆立棺文明

三幅對 紙本 水墨 共箱
石川九楊 真蹟之證
登録番號第0518號
137×22寸 / 196×31寸

Ishikawa Kyōyū (1945)
Gunshū Rikkān Bunmei

A triptych, ink on paper,
with a box signed and sealed by the artist,
with a certificate of authenticity
(Registration no. 0518)

¥1,000,000



横山 大観
よいやま たいかん

雨霧



絹本 水墨 共板額装
横山大観記念館登録は第139号
42×56cm / 66×80cm

Yokoyama Taikan (1868-1958)

Rain

ink on silk,
with a board signed and sealed
by the artist, framed,
Yokoyama Taikan Memorial Hall

Registration No. Ho-139

¥ 33,800,000